

- 腹痛に関する全国実態調査(一般女性および医師対象) -

**女性の4人に1人が、何もできなくなる程の「激しい腹痛」を経験
しかし、6割超は医療機関未受診
腹痛の原因を知りたい反面、受診すべき診療科や痛みの程度について迷いも**

- 医師側では、急激な腹痛について

「検査結果や所見と症状の強さが一致しない」と6割が難しさを実感-

- 各診療科での連携や、原因疾患となり得る難病のさらなる認知、検査体制充実が求められる-

Anylam Japan 株式会社(本社:東京都千代田区、代表取締役社長 カタルジーナ・マリア・ヴィッコス)は、女性および医師を対象に、「腹痛に関する全国実態調査」を実施しました。腹痛は、一般の方にとって身近な症状であり、軽度なものもあれば、激しい痛みを伴い生活に悪影響を及ぼすものもみられます。女性の場合は、月経や子宮疾患などによる腹痛と向き合うことも少なくありません。腹痛の原因は他にも様々あり、特に、激しい腹痛には、診断が難しい難病が潜んでいる場合もあるため、適切な対処が必要です。

今回は、女性における腹痛を取り巻く実態を可視化するため、腹痛経験や症状・影響、診療状況などを調査しました。あわせて、医療者側の対応の状況・課題意識についても調査しました。

<主な調査結果>

【一般女性 1次調査】

女性15万人(15~49歳)の腹痛経験や対応状況を確認しました。

◇女性の4人に1人が、何もできなくなる程の「激しい腹痛」を経験。6割超は医療機関未受診

- 激しい腹痛(生活に影響する/その間に何もできない、激しい痛み)の経験者は27%。中等度の腹痛(生活は何とか維持できる、中等度の痛み)の経験者を含めると全体の67%を占める
- 中等度以上の腹痛経験者の内、腹痛の頻度が1か月に1回以上ある割合は57%。年代が若いほど頻度が高い傾向がみられる
- 中等度以上の腹痛経験者では、腹痛への対応は、67%が「市販薬で対応した」、60%が「腹部や体を温めた」など、セルフケアが中心
- 激しい腹痛経験者の内、65%が医療機関未受診の状況

【一般女性 2次調査】

激しい腹痛経験者で、医療機関未受診/受診したが治療を受けていない/治療を受けたが改善していない状況の方を対象に、追加調査を行いました(有効回答数10,222人)。

◇腹痛により日常生活の様々なシーンや心理面で悪影響。つらくても気丈に見せようと努力も

- 腹痛による日常生活や心理面への影響について、85%が「腹痛によって学校や仕事、家事に支障が出たことがあった」、61%が「腹痛がいつ生じるのかを不安に思いながら過ごすことがあった」
- 腹痛時の心理変化は、51%が「憂鬱な気持ちになる」、40%が「イライラする・怒りっぽくなる」

- 腹痛時の対応として、48%が「腹痛でつらい時でもなんともないように振る舞っている」、34%が「我慢する必要がある」、30%が「セルフケアでなんとかすべき」

◇ 腹痛の原因を知りたくても、受診すべき診療科や痛みの程度について迷いもみられる

- 腹痛について78%が「原因を知りたい」、「どの程度の腹痛で受診すべきか知りたい」、73%が「原因に合わせた治療を受けたい」、71%が「どの診療科を受診すればよいのか知りたい」
- 腹痛の原因がわからない時にかかる診療科として、「一般内科」を選択する意向が最多で50%、「総合診療科」は9%
- 総合診療科がどのような診療科か理解している割合は22%にとどまる
- 総合診療科がどのような診療科か知った後*は、64%が腹痛の原因・治療の相談意向を示した
*【回答者への提示説明文】 総合診療科とは、様々な症状が出ていてどの科を受診してよいか分からない場合や、診断がついていない場合などにかかっていたり診療科です。専門治療が必要な場合は、各診療科と連携しながら治療することもあります。
- 激しい腹痛の原因となり得る8疾患の内、「なんとなくわかる」以上の理解度は、「子宮内膜症」64%、「急性胃炎」57%、「胃・十二指腸潰瘍」54%、「虫垂炎」51%に至るが、「急性肝性ポルフィリン症」では4%

【医師調査】

腹痛の診療を日常的に行っている、内科／消化器内科／産婦人科／救急科／総合診療科の医師を対象としました(有効回答数 1,725 人)。

◇ 急激な腹痛について「検査結果や所見と症状の強さが一致しない」と6割が難しさを実感

- 腹痛診療では、92%が「腹痛の診療では原因を特定することが重要」、85%が「原因が特定できない場合、早めに他科や他施設にコンサル**すべき」と考える
**診断や対応についてアドバイスを受けて、患者さんを紹介するなどのコンサルテーション
- 急激な腹痛の原因が特定できない場合にコンサルした診療科は、全体では「消化器内科」がトップで59%。消化器内科がコンサルした診療科は「総合診療科」がトップで42%
- 急激な腹痛の診療における難しさについて、60%が「検査結果や所見と症状の強さが一致しない」、「患者さんの訴えが続いたり強かったりして対応に苦慮する」を挙げた。また「通常の間診・検査では原因がわからないことが多い」も51%を占める

調査時期:

一般女性対象:1次調査 2021年12月14日～17日

2次調査 2021年12月22日～23日

医師対象:2021年12月15日～28日

調査方法:インターネット調査

<専門家コメント>

田妻 進 先生(JA 尾道総合病院 病院長／広島大学名誉教授／広島大学大学院客員教授／一般社団法人 日本病院総合診療医学会 理事長)

腹痛は、軽度なものを含めれば多くの方が経験される症状であり、医療者にとってもコモン(一般的)な症候です。国内外の報告によると、急性発症の腹痛による救急外来受診者は5～10%を占めるとされ、広島大学病院総合診療科の過去の調査でも、成人の受診理由の1位が腹痛で約15%に至りました。

今回は10代後半～40代の女性を対象とした大規模な調査となりましたが、中等度以上の腹痛を経験している方が約7割を占め、何もできないほどの激しい痛みを経験している方は4人に1人に及ぶことが

結果として示されました。激しい腹痛を経験された方の中には、痛みの強さに苦しんだり、原因が分からず、痛みがいつ起こるか不安を抱える方も多いと思います。どのような場合に医療機関を受診し相談すべきか、改めて適切な対応を理解いただくことが重要と考えます。

激しい腹痛を引き起こす原因となる疾患は様々です。消化器系疾患では虫垂炎や急性膵炎、腸閉塞（イレウス）、炎症性腸疾患などが、婦人科疾患では子宮内膜症などが原因の場合もあります。また原疾患が腹部にあるとも限りません。例えば心筋梗塞や、肺炎などの呼吸器系疾患や全身疾患でも、腹部に痛みが生じる場合があります。

他にも、急性肝性ポルフィリン症（AHP）などの難病が隠れていることもあります。AHP は、若年女性の発症割合が多い遺伝性の希少疾患で、激しい腹痛を引き起こすことがあります。一部の薬剤やストレス、過度のダイエットなどが症状の引き金になる他、女性ではホルモンバランスの変化（月経や妊娠など）により、症状が現れやすくなります。症状からの鑑別が難しいため、AHPと診断されずに他の疾患と誤って判断され、適切な治療が行われないまま、長年にわたり激しい腹痛や様々な持続する症状に悩まされているケースもみられます。

今回の調査では、多くの医師が腹痛の診療では原因を特定することが重要と回答した一方、急激な腹痛を訴える患者さんの診療については、半数以上の医師が「検査結果や所見と症状の強さが一致しない」「通常の間診・検査では原因がわからないことが多い」などの難しさを感じている実態が示されました。腹痛の診療は、特定の臓器・疾患に限定せず多様な知見を持って多角的に行うことが求められます。そこで、重要な役割を期待されるのが総合診療科です。総合診療科では、どのような疾患にも対応し、速やかに診断を行います。症例に応じて、専門的な深い知見が求められる場合には各診療科と円滑に連携しており、腹痛に悩まされる患者さんの助けとなれるよう、診療を進めています。

激しい腹痛が繰り返し起こる場合や医療機関で診断がつかない場合、治療を受けても良くならない場合には、総合診療科への相談も検討していただければと思います。

Alnylam Japan 株式会社について

Alnylam Japan 株式会社 (<https://www.alnylam.com/alnylam-japan/>) は、次世代の医薬品として注目される核酸医薬の一つである RNAi 治療薬を日本の患者さんに提供するため、2018 年 7 月に設立しました。RNAi 治療薬は、従来はターゲットにできなかった標的分子に選択的に作用することで、これまで治療が困難だった疾患の新たな治療選択肢となる可能性があります。RNAi 技術を応用して、mRNA を標的として開発された世界初の siRNA 製剤オンパットロは、当社が日本国内で 2019 年に上市・販売した最初の製品です。2021 年には、2 成分目となる siRNA 製剤ギブラーリを上市・販売しています。当社は、医療の未来を切り拓く可能性のある新しい治療薬の開発に取り組み、アンメットニーズの解消に貢献することを目指しています。

###

本プレスリリースに関する問い合わせ先:

Alnylam Japan 株式会社

TEL: 03-6629-6180

Mail: press@alnylam.com